

Mary Elizabeth Ingham, CSJ: *Ethics and Freedom. An Historical-critical Investigation of Scotist Ethical Thought*

University Press of America, 1989, 274 p.

八 木 雄 二

著者のインガムは1951年生まれの若い研究者であるが、この学位取得論文で示している才知は、スコトゥスに関する個々の研究を収斂してゆく上で恐らく今後のスコトゥス研究を導いてゆくものであろう。各章の冒頭でこれまでのスコトゥス研究を簡略に紹介することで問題点を浮き彫りにし、その上でスコトゥスの重要なテキストを介して自身の見解を形成して見せている。一方で特殊な問題を扱いながら、全体的視点を失わない穏当さは、十分な知的訓練を受けていることを想像させる。

第一章「哲学的コンテクスト」で、特定の一つの概念がスコトゥス理解の鍵となるのではなく、複数の概念がスコトゥス哲学を解明するために必要であると考える著者は、『オルディナチオ』と『第一原理論』から、その概念を引き出している。それは、まず、「存在概念」が第一の概念であること、また「本質的秩序」が宇宙のうちに考えられていること、人間認識の本性が「抽象と直観」であること、そして「神の自由」がもつ意味の重大性である。著者によれば、スコトゥスの倫理学の基礎に「神の自由」がある。神の本質は「存在の一義性」のために人間精神に知られるところとなる。そして神の意志は自由に創造する意志として「本質的秩序」を宇宙のうちに形成し、人間はそれを認識する。第一章で著者はこのように鍵となる複数の概念を通して漠然とながらスコトゥス哲学の全体像を描いている。細かな点はさておき、この全体像は見事なものと思われる。無論のこと、こうした概念の取捨選択は、かなりのところまでこれまでの他の研究者たちの仕事に負っていることは、彼女自身がつけている多量の註からも明らかである。

第二章「自由の首位性」において、著者はスコトゥスにおける自由意志の本性を二つの方向から分析する。一つは、スコトゥスのテキスト自身のうちに知性と意志の関係に関して進展が見られるという側面からのものであり、一つは、1277年の禁令の影

響である。第一の分析を通して著者は、スコトゥスが意志を知性から完全に切り離して意志の首位性を語っているのではなく、意志は知性との協働を通して「自己決定」self-determination としての自由をもつ、と主張していることを明らかにしている。第二の分析は、1277年の禁令とスコトゥス哲学とが、両者とも、神と人間の自由を守ろうとする方向をもっていること、人間の行為における本性的原因の役割を制限しようとする方向をもっていること、において一致していることを明らかにしている。

第三章「神の自由」において、著者はスコトゥス哲学の中で「神の自由」がきわめて重要な意味をもつこと、また、Pannenbergの研究——スコトゥスにおいて目的因が、神による「受容」acceptatio に次第に取って代わってゆくのが見られる——を、別のテキストを通して確認している。また神の「絶対的能力」potentia absoluta は、たとえ後の唯名論において重要な位置を占めることになるとしても、スコトゥス哲学の中ではそれほど重要な位置を占めていないことを確認している。特に、「受容」acceptatio がスコトゥス倫理学を考える上できわめて重要で、スコトゥスにおいてはこのような神学的観点抜きに倫理を考察することはできないことを論じる著者の主張（先立って、Vignauxの主張ではあるが）は、説得力がある。

第四章「自由と法律」で、著者は、スコトゥス自身においてはさほど重要な意味をもたなかった政治的側面を取り上げている。言うまでもなく神の自由の絶対性は、戒律の制定、廃止の自由にまで及ぶものであるがゆえに、この問題は神の自由がもつ問題を理解する上では重要である。そしてスコトゥス自身の意図から離れて、神の戒律の制定と廃止の自由は人間の実定法の制定と廃止の自由の可能性として受け取られてゆくとき、歴史的に見て、スコトゥスは、法を、理性的本性のみによって規定されるものではないと見る思想を生じたと考えられるのである。なお、スコトゥスにおいて「永遠法」のイメージは、「永遠の法律制定者」のイメージへと変化しているという著者の指摘（p. 121）は、興味深いものがある。

以上四章で第一部が構成されており、著者はその分析を通してスコトゥスの倫理学における「神の自由」の重要性を浮き彫りにしている。以下第五章から第八章までが第二部であり、著者はここでスコトゥスにおける神の自由の倫理的諸結論を示している。

第五章「倫理的善」において著者は、まず他の諸研究を検討することによって、スコトゥスが意志の首位性を主張するとき、倫理的善の客観的基礎をどこに置くかが問

題になることを明らかにしている。実際、意志の自由の重視は、目的因性の軽視と不可分である。したがって、幸福を目的とするアリストテレス的な倫理の基礎はスコトゥスにおいては意味を失っているのは明らかである。著者の結論は、目的因の客観性（必然性）が意味を失い、起動因の重要性が増す中で、知性判断（正しい理性のはたらし）の客観性が、倫理的善を保障するものとして現れている、ということである。

第六章「正しい理性と徳」において、著者は他の諸研究が未だ充分にはその概要を捉えるに到っていない問題に踏み込んでいる。しかしこのような問題においても著者の結論が概ね妥当なものとして了解しえるのは、著者が諸問題の解決に際して十分な手続きを踏んでいるからであろう。著者は、スコトゥスが行為を、目的因と起動因の結果としてではなく、知性という本性的原因と、意志という自由な原因の、両者とも起動因であるところの諸原因の協働の結果として説明していることを指摘している。そして目的因の重要性が失われるのなら、目的（幸福）に到る手段・媒介としての「徳」の意味もまた失われるのは必然だろう。したがってスコトゥスの倫理学はもはやアリストテレス的ではない。スコトゥスの倫理学の中心には「徳」はなく、スコトゥスは人間の行為の基盤として、正しい理性（*recta ratio*）——ただしこれは *synderesis* ではない——と、自由な意志のみを考えているのである。著者は二つの興味深い指摘をしている。一つは、自由と本性的事象との対比はストアの伝統であること、スコトゥスはストアの重要な作品に触れていた可能性があること（p. 201）、第二に、倫理的問題の考察に際して、スコトゥスは少なくとも、直接には一度も『ニコマコス倫理学』に言及していないこと（p. 203）、である。なお、自由と必然的原因の対比に関連して生じてくるカントの倫理学との類同性については、著者の態度はいくらか慎重である。それはスコトゥス倫理学はあくまでも神の自由という神学的側面から理解されなければならないからであるが、それでも、著者はスコトゥスが近代倫理学の源になったことは明らかであると見ている。

第七章「功績（*merit*）の秩序」で著者は、功績の秩序は全面的に神の自由（神の受容）に依存していること、したがって、人間が正しい理性に従って倫理的に良い行為ができるとしても、それが功績的行為となるかいなかは、人間の力を超えているという問題こそ、スコトゥスが苦闘している問題であることを明らかにしてくれている。

第八章「スコトゥス倫理学の展望」は、以上のまとめである。この章で著者は、スコトゥスの神学的倫理学の特徴を形成したものが「神の自由」であること、しかもそ

れは主に1277年の禁令の影響であることを特に強調している。著者の視点は、著者自身が述べているように、歴史的であって体系的ではない。しかしこれまでの研究が一般にこのような視点を欠いていたことは事実であり、この研究はそれを補うものとして有意義なものと言える。ただし、そうは言ってもスコトゥスの体系的努力に関して著者が不注意であるというのではない。実際、スコトゥスにおける目的因の後退に根拠を置いての分析には著者のその面での手腕もあることを感じさせる。すなわち、スコトゥス哲学における目的因の後退はスコトゥスにおける自由の首位性と軌を一にし、さらに目的論的倫理学の後退と軌を一にしていることは、著者の説明から充分に明らかである。

この研究は、全体的に見て、過去の研究に対する十分な日配りと歴史的観点の充実に目立った特徴をもっており、そこから得られているスコトゥスの神学的倫理学の全体像の分析は、書評子にもきわめて妥当なものと思われる。加えて詳しい親切な註は、この方面には暗い書評子にとって教えられることが多かった。スコトゥスに関するいくらか専門的な入門書としては、今のところ最高のものと思われる。

Marilyn McCord Adams: *William Ockham*

2 vols. University of Notre Dame Press, 1987. pp. xx+1402

清水哲郎

本書はオッカム哲学に、一貫した姿勢を保ちつつ、さまざまな問題面から迫るものであって、第一部：存在論、第二部：論理学、第三部：知識の理論、第四部：自然哲学、第五部：神学からなっている。まず、その内容を瞥見しておく。

第一部においては、前半で普遍に関する唯名論的・概念論的解決が、ことに概念のあり方についてオッカムが採った、それは思念対象として存在するとする理論 (objective-existence theory)、およびそれは理解する働きそのものだとする理論 (mental-act theory) との関わりにおいて議論される。吟味の中心は概念が「自然的に表示する」ということ、それを「類似」によっていかに説明しきれるかにある。